

KAIKE PRESS

皆生温泉のこれからを伝えるメディア
「カイケプレス」

2024 Mar. 24

第24号 / 令和6年3月発行



山下 裕子

広場ニスト。日本各地の「まちなか広場づくり」に伴走者的で立ち位置で活動する。

吉谷 崇

設計領域代表取締役。松山市花園町通りで土木学会デザイン賞最優秀賞を受賞。全国各地の公共空間デザイン、まちづくりに関わる。

特集

『失敗を恐れない 挑戦者たちがつくったまち』

もっとチャレンジが生まれるまちを目指せば、もっと皆生温泉は光り輝く。

温泉関係者、地元金融機関、建築デザイナー、観光振興団体、行政が膝を突き合わせる「皆生温泉エリア経営実行委員会」。地域に暮らす皆さんとのワークショップや実証実験、空間整備などを通じ、皆生温泉の30年後を見据えた未来への投資をしています。

こうしたまちづくりの活動は、地元のメンバーだけで推進できるものではありません。皆生温泉エリア経営実行委員会では、アドバイザーに“外からの眼”で助言をいただく体制をとってきました。

土木、建築の垣根を越えた設計や、都市デザインを手掛ける設計領域（東京都）の代表を務める吉谷崇さんと、まちなかの広場づくりに関わっている広場ニストの山下裕子さんのお2人です。実行委の活動が本格化した2021年度から何度も皆生温泉に足を運び、街の変化に、様々な形でアドバイスを頂いてきました。これまでの活動を振り返ってもらい、今後の皆生温泉の展望を聞きました。

山下さん「皆生温泉から境港まで自転車で往復し、行きと帰りに同じ道を通ったけど、空と海の色の変化がすごくて、同じ所と感ぜませんでした」

吉谷さん「子どもの頃に旅行で来た時は、海で泳いだという印象が強かったけれど、実は温泉の目の前に海があり、すごい風景の力を持った場所なんだと気付きました」

2人が皆生温泉に抱いた最初の印象はそれぞれですが、共通したのは「風景の魅力がたくさんある」ということ。それだけに実行委の活動が始まった頃は、魅力が十分に活かされてなくて、「もったいない」と感じたそうです。

活動が本格化すると、皆生温泉エリアを周遊する「うごくまちぐるぐるかいけ」や、温泉旅館が皆生海岸に面した部分の垣根をなくしたり壁の一部を改装して、遊歩道を散歩することで人が自由に使えるベンチやウッドデッキを設置する「ファサード事業」などでまちの空気が変わります。最近は飲食店などの新店オープンも続くようになりました。

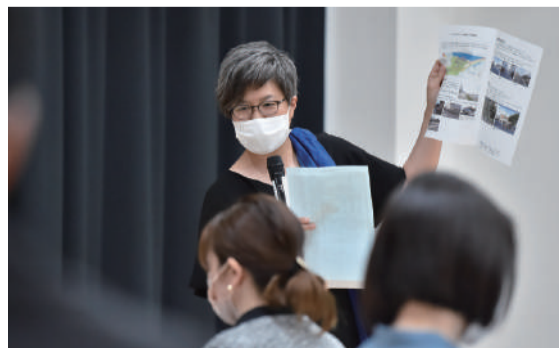
山下さん「最初の頃は会議に伺う際も、皆生温泉には食べる所が少ないから、他で食べてから向かおうと思っていたけど、今は豊さの指標でもある選択肢が本当に増えました」

吉谷さん「まちを歩いてベンチで休んだり、飲食店があつたりというような、まちにとっての『当たり前』が増えてきました。まちかどにお店が出来たり、街灯が整備され夜の雰囲気も変わって、歩いている人の姿がほんとうに増えたと思います」



『うごくまちぐるぐるかいけ』では、ここちいいまちを実現していくための施策を様々実施。車道を狭め歩行空間をベンチや植物で一時的に作ってみる、といった実験なども行った。

かつては旅館に着くと、建物の中で飲食も買い物も完結したので、宿泊者はわざわざ外を出歩きませんでした。近隣の人も用事がないと温泉街に行くこともなかったので、次第に人通りが少ないエリアになってしまっていたのです。しかし、現在は店が増え、休憩できるベンチが設置されるなど歩きやすい設備も少しずつですが整ってきて、若い女性グループがランチやスイーツの店を探す姿も見られるようになってきました。



全国各地で広場づくりを実践する山下さんは正にコミュニケーションの達人。アドバイザーとしてだけでなく、ワークショップや人材育成スクールの司会などもお手伝いいただきました。



実行委員会の事業の一環で整備した湯喜望 白扇さん海側のデッキ。旅館やホテルをまちや海に開き、観光客にも地元民にも憩いの場となることを目指して整備から活用実験まで様々な取り組みを実施。

akippa 予約で確実! 便利!!
エリア内100台以上!!!
皆生温泉で遊ぶなら駐車場はアキッパ!!

(広告募集中) このスペースでお店や会社のPRしませんか 毎月4,000部発行

吉谷さん「今がゴールではないと思うんですよね。いろいろな活動が起きて、いくつかの場所が生まれてきました。それらの活動を継続させ、場所を活かしていくためにも、これからは更に、まち全体の景観や魅力を磨いていく動きが必要になってくると思います」



未来の皆生温泉の姿を参加者みんなで妄想して案を出していき、模型に表現されていく『妄想模型』は吉谷さんチームが製作。ワークショップなどで何度も地元の意見を吸収し模型を作り換えていった

温泉を有する街の資源にスポットライトが当たるようになり、人の往来は確実に増えています。けれども勝負はこれから。継続した活動も求められてきます。



松林や空き地など活用しきれない場所で、人が集う小さな取組を行い、参加者と共にその場の価値共有や活用機運を高めていった。

山下さん「そうですね。磨き上げていく中では『失敗した人たちがつくったまち』というブランディングもアリだと思います。今はチャレンジが必要な時代。『失敗したけど皆生で朗らかに生きてるよ。だから安心していつでもおいで。』と言えるまちになってほしいです」

吉谷さん「例えば、お店で働いている方が『僕は皆生の人間じゃないけど、失敗して皆生に来て店に置いてもらっている』という話が、いまでも聞かれます。これからもチャレンジを支えるまちであってほしいです」



初開催のぐるぐるかいけに向けて製作した屋台は現在も活躍中。レンタルで利用することもできる。屋台は正に、小さくチャレンジして、失敗できて、改良できるツール。実行委員会活動が本格化した当初から『失敗』を楽しみ、チャレンジが生まれやすいまちにしたいという思いは、様々な活動に内包されているのかもしれない。

皆生温泉の歴史は、決して順風満帆ではありませんでした。土地の浸食との戦いでも数々の失敗の後に今があるでしょう。観光誘客やまちづくりの活動でも、数々の失敗もあるでしょう。アドバイザーのおふたりは、そういったことから目をそらさず、むしろ強みにしようと言っています。固定概念にとらわれない考え方が、これからの皆生温泉の活性化のヒントになることは間違いありません。

隔月連載コラム

「孫さん、ウェルビーイングって何ですか？」

皆生温泉エリアで目指す「ウェルビーイング」。映画製作や即興劇、路上での健康相談など、様々な方法でウェルビーイングを高めるための活動を実践、研究する孫大輔さんに「ウェルビーイング」についての連載、最終回です！

「屋台」と地域のウェルビーイング

『日本のまちで屋台が踊る』(屋台本出版, 2023年)という面白い本が発売されています。屋台をつかってまちを面白くしたり、地域のウェルビーイングを支えたい医療者など、屋台の実践者の5人のインタビューと、文化人類学者、社会学者、哲学者などの専門家に「屋台」の意義をあらためて考えてもらった本になっています。かくいう私も、屋台実践者の一人としてインタビュー記事が載っています。

私がまちで屋台をやっていたのは2016年頃から、東京の谷根千(谷中・根津・千駄木)地区でのことです。谷根千は市民主体のお祭りやイベントが盛んな地域で、毎年10月に「芸工展」という企画が1ヶ月間開催されます。そこで私たち医療者と、建築関係者、地元の人などが協力して小さな屋台を

つくり、芸工展の期間中、屋台を実際に動かしてみました。屋台をひいて町の人に声をかけ、コーヒーをふるまいながら自由な対話をするという活動です。結果として、「屋台」という越境的なツールを軸として、多様な人とのつながり形成が起きることがわかりました。ふだん、病院や保健所などには決して行かないような住民ともつながることができたわけです。これは医療者にとっては大きなことで、なぜなら、ふだん出会えない病院嫌いの人などにもアプローチできるという利点があるからです。また、地域の人からすれば、ふつうは医療機関に行かなければ出会えない医療者とゆるくつながれる場に、屋台がなっていたということでしょう。この「ゆるいつながり」あるいは「ゆるやかな紐帯」は、地域のウェルビーイングにとって重要なことが分かっています。自殺希少地域の調査をおこなった岡檀さんの研究では、自殺予防因子として「ゆるやかな紐帯」が挙げられています(『生

き心地の良い町:この自殺率の低さには理由がある』講談社)。つまり、ふだんは挨拶程度の関係性、しかし困ったときにはしっかり支えあえるような関係性です。「屋台」も地域の中で定期的に動かすことで、この「ゆるやかな紐帯」をつくるのが可能だと私は考えています。

地域のウェルビーイングには、この「ゆるやかな紐帯(ゆるいつながり)」がとても重要です。それが、地域の幸せのかたちである「ゆるやかな幸せ」につながると言うからです。私たち日本人が感じる「幸せ」には、この「ゆるやかさ」があると哲学者の長谷川宏さんは言います(『幸福とは何か』中公新書)。それは日常の現実からそれほど離れることのない、日々の暮らしやふるまいの中にあらわれ出る、幸福の「ゆるやかさ」なのではないでしょうか。

孫大輔

家庭医(総合診療医)/

鳥取大学医学部地域医療学講座准教授